

第82号
平成20年
9月13日

すまいるたん



汐入

発行元
東京新聞
南千住東口専売所
TEL 5850-3699
発行責任者
鬼塚 佳代子
TEL 090-2657-0300

人生いろいろ 60年の歴史、明月館



「時間が止まっているんです」

千住大橋のたもとにある明月館（簡易旅館）は、6年前に取材した時と変わらない日常が存在していました。

宿泊料はずっと変わらず一泊1・400円（2畳）、静かな一人だけの城が待っています。壁には防火材のタイガーボードが使用され、TVとふとん付き（年2回ふとんは取替え、夏用・冬用、シーツの取り替えは随時）で、風呂（PM6～9時半・日曜休み）・トイレ・炊事場は、協同です。コインランドリーもあります。冬は練炭・夏は電気ポットで、いつでもお湯が使用することができます。

「必ずどちらかがいるようにしています」

親の葬式にも二人揃って出かけなかったという管理人の佐々木忠昭さん（65歳）は奥様とふたり、23年間年中無休で働き6人の子供を育ててきました。忠昭さんは脳梗塞で4回倒れましたが、病にも打ち勝ち朝6時には帳場に座りトイレ、廊下、風呂掃除をすませ、門限の夜12時に玄関の鍵を閉めて一日が過ぎて行きます。

「何があってもルールを守ってらってます」

宿泊者の方達は、TVをイヤホンで聞く、来客は外で会う等ルールを守りお互いに迷惑かけないように暮らしています。それが住み易さになるのでしょうか。10年前までは出稼ぎの方も多くなりましたが、宿泊者の大半は長期滞在の方達です。葛飾区からの生活保護の方も引き受け、1/3位の方が生活保護を受けられています。半世紀ここで過ごしている80歳代の方もいます。

「ここでお見送りをしたことはないんです」

宿泊者の方の一人一人の体調を見守り、様子がおかしいと病院の受診を勧めます。入院されると心配で週に1度は、身寄りのない方のお見舞いに伺うこともされている佐々木夫妻は、遠くは東久留米の病院にまでお見舞いに通われたこともあります。都営住宅に入ったのに戻ってきた人もいるのは、見守る夫妻の優しさに惹かれてなのでしょう。かつての取材時には運送会社の寮として住んでいた方も会社が倒産後もそのままも住んでおります。

「顔を見てから」

荒川区は宿泊施設が外国人向けのインターネットのホームページ（HP出張サラリー

マンや就職活動で上京する地方の大学生なども利用するため）を制作する際の費用を助成する制度を始めました。南千住でもHPを作って前にご紹介した台東区の簡易旅館と同様に出張してきたサラリーマンや大学生等を受け入れるところも出てきました。しかし、電話1本で宿泊を受けるとはなかなか難しいことだと佐々木さんはおっしゃっています。外国人の方が来ても対応ができないし、生活のずれがあります。長年の顔見知りの中で生活して来ている宿泊者の平安な日常を崩してしまう不安もあります。ほとんど満室で空き部屋がある時も少ないのですが、顔を見て安心してから利用していただくことを心がけています。

「避難訓練を年2回しているけれど誰も部屋から出てこない」

人と関わりたくないけれど、そっと見守って欲しい。39室に住む人の一人だけで歩む人生をひとりひとり後ろから静かに見つめ、受け入れてくれる佐々木夫妻に安心感を持って暮らされているのでしょうか。

「人生いろいろ」

血のつながりはなくても、人間の心のつながりがある
明月館です。

★明月館★
南千住 7-21-10
TEL (3807) 1387